

## O3-029

## 全国市町村における母子保健ボランティアの活動状況

佐藤 拓代<sup>1</sup>、高橋 睦子<sup>2</sup>、福島 富士子<sup>3</sup>、  
今村 晴彦<sup>4</sup>、鎌溝 和子<sup>1</sup>

<sup>1</sup> 公益社団法人母子保健推進会議

<sup>2</sup> 恵泉女学園大学

<sup>3</sup> 東邦大学

<sup>4</sup> 長野県立大学

## 【目的】

全国の母子保健に関するボランティア（以下、ボランティア）の状況を明らかにする。

## 【方法】

令和4年に全国1741市区町村に質問紙調査を行った。

## 【結果】

693自治体（39.8%）から回答があった。「個人・団体に委嘱あり」「一部母子保健事業の委託団体あり」「委嘱委託無しも母子保健等に協力団体あり」のいずれかがあるのは339自治体（48.9%）で、紹介や把握がない自治体は23.8%であり、町及び村に多かった。団体名では母子保健推進員44.8%>民生・児童委員9.4%>保健推進員8.0%>愛育委員7.7%等であり、「その他」が151カ所（44.5%）と多かった。「その他」の内容を分類すると、「民生・児童委員」32カ所（9.4%）、「食生活改善推進員等」19カ所（5.6%）、「各種NPO団体等」21カ所（6.2%）、「絵本等（読み聞かせ含む）関係団体」19カ所（5.6%）等であった。母子保健推進員については、当会議が平成23（2011）年度に実施した調査では23.4%で、本調査では21.9%でありほぼ同程度の自治体にあると考えられた。母子保健推進員と愛育委員の活動はよく把握されており、妊娠期は「妊娠期の教室への協力」は母子保健推進員が多く、「妊娠期に団体が企画・運営の活動」は愛育委員が多く、「乳児家庭全戸訪問」は母子保健推進員が多かった。出産後では、4か月児健診、1歳6か月児健診、3歳児健診ともに母子保健推進員が多く、「産後子育て期への自主的活動」は愛育委員が母子保健推進員の4倍程度多くなっていた。

母子保健から子育て期の事業に協力とまでいかないが、紹介している団体があるのは232自治体（33.5%）であり、「地区で子育てサークル主宰」61.2%>「多胎児を持つ親の互助的活動実施」42.2%>「障害児を持つ親の会実施」25.9%等であった。村では「障害児を持つ親の会実施」「多胎児を持つ親の互助的活動実施」がなかった。

ボランティアの捉え方は、「住民に身近」29.0%、「行政とのブリッジ機能」28.9%などに加え、「新たな人材確保が困難」20.9%などがあげられていた。

## 【考察】

母子保健に関するボランティア活動では、母子保健推進員の拡がりが大きく妊娠期から子育て期までよく活動しており、自治体は住民に身近等の肯定的意見が多かった。しかしボランティア団体を把握していない等の回答は小さい自治体に多く、活動内容により広域でのボランティア活動の可能性を検討する必要があると考えられた。本調査は日本財団の助成事業により行った。

## O3-030

## 自閉症スペクトラム障害を有する小学校高学年の子どもにおけるレジリエンスの構成要素

海野 潔美<sup>1</sup>、藤岡 寛<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 茨城キリスト教大学 看護学部 看護学科

<sup>2</sup> 茨城県立医療大学 保健医療学部 看護学科

## 【目的】

学期後半における自閉症スペクトラム障害（以下ASDと略す）の子どものレジリエンスの構成要素を本人の語りより明らかにする事である。

## 【方法】

研究対象は、ASDと診断され普通学校に通学している小学5年生である。面接内容は、自分の特性をどのように受け止めてきたか、生活の中でうまくいかず困っている事とその対処方法、将来の楽しみと不安についてであった。分析方法は、面接データより逐語録を作成し、Grotbergのレジリエンスの3要素に基づきコード化、カテゴリー化を行い質的に分析した。

## 【結果】

平均面接時間は、14分48秒（7分55秒～18分20秒）であった。子どもの語りから、Grotbergのレジリエンスの3要素について、60個のコード、36個のサブカテゴリー、10個のカテゴリーが抽出された。

ASDの子どものレジリエンスの構成要素は、「I AM要因」として【好きなこと】【自分の性格】【苦手だけど好きになったこと】【これから頑張りたいこと】、「I CAN」要因として、【得意なこと】【頑張っていること】、「I HAVE」要因として、【友達との関係性】【こまったときの対処方法】【将来の夢】であった。

## 【考察】

研究対象者においては、自己全体に対する理解が進んでおり、他者との違いや自己の良い点にも十分気付きを得られていた。その上で発達段階や発達特性を踏まえると、レジリエンスとしては比較的高く、年齢相当であると考えられた。しかし、自己理解が進んでいるものの自己尊重においてはまだまだ発達途上であり、今後自己の内面や他者からの評価以外の自己像の認知などが課題である。それにより「I AM要因」が深まり充実してくると考える。研究対象者は経験から様々な対処方法を獲得していたが、意味付けが弱い状態であった。

## 【結論】

ASDの子どもの自己の苦手なところを理解しており、そのための対処方法を経験から学び実践することができていたが、その意味付けなどにおいては弱い状態であった。

ASDの子どもの周りには信頼できる人が多数存在し、その子どもが決めた役割を担っているが、リソースとしては十分活用できていない面が見られていた。

ASDの子どもの自己の苦手なこと、できないことがある自分をありのまま受け入れつつある状態であったが、他者と違って今の自分がそれでよいといった自己尊重までは行きついていなかった。